

第1分科会

人権確立をめざす教育の創造
部落問題をはじめとするさまざまな
人権問題の解決をめざす教育をどう
創造しているか

⑤分散会

1 討議の概要

本分散会では、6本の報告があり、課題のある子どもを中心に据えた人権学習や仲間づくりの実践、それらを通じた教師の変わりめや立ち位置が語られた。参加者からも実践を踏まえた議論が深められた。

徳島県人教からは、「ふるさとの人権文化を受け継ぐ子どもを育てる～親父の背中から学んだ人権・同和教育～」という報告があった。地域の学習会や子ども会が、法が切れても存続し、その思いが今につながっていることを知った報告者は、地域と学校がつながって子どもたちを育む子ども会に関わっていった。学校では周りの子から避けられがちなKが、子ども会でがんばって活動している良さを学級の人々に知ってもらう実践も語られた。討論では、「ムラの子であろうがなかろうが」といった地域ぐるみで子どもたちを育むことのあたたかさも伝えられたが、「自分の生まれ育ったムラを離れて暮らしたときに、ムラの子が一人でたたかえる力をつけてほしい」という意見も出た。差別の現実が突然目の前に襲いかかったときに、それが差別だと気づき、「おかしい」と言える力や、胸を張ってふるさとを語れるような取り組みをしていかなければならないのではという問題提起もあった。

大阪府人連からは、「分かれようとする気持ちをもつ～子どもたちから学んだもの～」という報告があった。報告者は、ちがいを受け入れることが難しい子どもたちに、「長北人権宣言」の中でも、特に「分かれようとする気持ちをもつ」ということを大事にしながら、様々な教材や人と出会わせていった。子どもたちは、修学旅行や聞き取り学習などで学んだことを自分とつなげて考え、自分と周りの友だちとの関係性を見つめていった。そんな丁寧な取り組みを何度も重ねていく中で、少しずつ子どもたちが変わっていく。CやDがちがいを認められ、安心できていく姿を見て、Aがやわらかく変わっていった。それは、「差別に負けるな」というお母さんの思いを、「何事にも負けるな」と捉えていたAが、強がって生きなくてもいいんだと思えてきたからだった。討論では、「長北人権宣言」が、卒業した子どもたちの中にずっとつながっていることも中学校から報告された。

それは、「この子が変われば集団が変わる。集団が変わればこの子が変わる。」と信じて、子どもたちに真摯に向き合う報告者の姿勢や、日々の丁寧な営みがあればこそだった。

京都市人教からは、「ファッションは廃れるが、スタイルは永遠だ」という報告があった。報告者は、生活の厳しさやしんどさを「自己責任」にするのではなく、その背景にある社会の差別構造の結果だと捉え、被差別の立場の子どもたちに徹底して寄り添う姿勢について語った。学校全体の取組として、「スケジュール帳」や「授業スタイルの変革」にも取り組んでいった。「差別はあかん」という授業ではなく、差別が生む社会的弊害について考えさせる授業が紹介された。その授業の中の「差別はしてもいいと思う」という子どもの意見について論議があった。会場からは、差別について本音で語り合う雰囲気醸成は必要という意見もあったが、「果たしてこれが『本音』なのか」「そう言わせてしまっているものは何なのか掘っていかなければ」「自由な発言が被差別の立場の子を傷つけはしないかと想像し、立ち止まる力を育てたい」といった意見も出た。自らの立ち位置を明らかにし、被差別の立場の子どもたちや親のしんどさに徹底して寄り添い、一緒に解決することができているか、考えさせられる討議だった。

滋賀県人教からは、「こいつはほっとけへん～Aさんの進路保障を求めて～」という報告があった。暴言・暴力を続けるAに、報告者は「徹底的に寄り添い、見捨てるようなことはしない」と思いつつも、暴言や暴力を「やめさせようとする」ことや、「静観する」ことしかできずにいた。しかし、毎日のように家庭訪問を続け、保護者やAの話を聞き続ける中で、親から自分のことを認めてもらえないAの苦しみやしんどさに気づいていった。そして、その思いを受け止め、Aのしんどさを一緒に考えていく報告者は、一人の人間として、Aに自らを語っていった。「先生、いっぱいしゃべってくれてありがとう」というAの言葉は、先生が向き合ってくれたと実感できたからこそその言葉だった。また、「一番苦しんでいたのはA自身なんだ」「Aが本当に求めていたのは、みんなから認められることだったんだ」と気づいた報告者の変容が、Aを変えていった。それまで誰にも自分を認めてもらえなかったAは自尊感情を取り戻し、クラスの仲間ともつながる中で顔を上げ、生きるエネルギーにしていた。子どもの「荒れ」から逃げてはいないだろうか、きちんと向き合っているだろうかと突きつけられ、考えさせられる実践であった。

佐賀県同教からは「この子を見つめて～厳しい状況にある子どもを笑顔にするために～」という報告があった。クラスの子どもたちが、Aに対してマイナスの印象をもっていることに気づいた報告者は、Aを中心に据えた仲間づくりを始めた。

Aをマイナスに見るまなざしは、クラスの中にある「できないことや失敗をいじる」価値観からきていた。その価値観は、周りの子どもたちの自信も奪っていた。Aにとっても誰にとっても居心地のよい仲間づくりのための学級の「ルール」を意識させることや、学級会、体育での取り組みは、子どもたちの差別を生み出す価値観を変えていく作業だった。「マイナスの言葉」がなくなり、子どもたちはお互いのがんばりや成長を認め合うようになった。報告者自身も子どもたちのがんばりや成長を伝えていくことを続けていたり、自分の生い立ちや母や父に対する思いを伝えたりする中で、Aだけでなく、子どもたちのつながり方も変わっていった。体育が好きで活躍できたAの良さ、水泳が苦手でも精一杯がんばったA。「できたら認められる、できなかったらだめ」という価値観ではなく、いいところも、できないことや苦手なことも、どちらも認められる価値観、そして、つらさや弱さも見せていくことこそ、子どもたち同士をつないでいくのだと学ばせてもらった実践だった。

愛媛県人教からは、「出会いが人を育てる」という報告があった。「Aは苦手なことに挑戦しない」。そう苛立っていた報告者は、ある障害者の言葉をきっかけに、Aの苦手なことやできない理由、Aの思いや頑張りに気づいていった。また報告者は、「周りの子どもたちが、Aに気を遣っている」と思っていたが、実は、子どもたちはAを理解し、それを先生に伝えようとしていたのだということにも気づいていった。小さい頃からありのままのAを受け入れ、Aの困っていることに気づき、声をかけていた子どもたちの、ともに育つ姿があった。報告者は、「人と向き合うためには、その人のことを知ることが大切だと気づいた」と語った。「困った子」が本当は「困っている子」ではないのか、と問い直した報告者の向き合い方が子どもたちに自信をもたせ、成長させていった実践だった。

2 討論から（成果と課題）

報告・討論・交流の中で、次のようなことが確認された。

- ・「子どもと向き合う」ということはどういうことなのか。「困った子」は本当は「困っている子ではないのか」、あるいは、なぜ「荒れ」ているのか、なぜしんどいのかを問い直し、その背景を見取っていかなければならない。そして、その子を困らせているものや「荒れ」、しんどさの中に差別の現実はないのか、また、その子を「困った子」だと見てしまう自分や逃げてしまう自分の中に、差別の現実はないのかを丁寧に向き合っていきたい。そんな教職員の変わりめが、子どもたちを変容させていくことも確認された。

- ・一人ひとりの子どもの背景を仲間づくりの課題にしていくこと。子どもや保護者からの聞き取り

を通して見取ったしんどさや差別の現実、思いや願いに寄り添い、向き合うだけでなく、それを仲間づくりの課題にしていく実践が報告された。子どもたちを様々な学習と出合わせ、学習で学んだことを自分のことと重ね、友だち関係を見つめていった取り組みを丁寧に重ねていくことで、子どもたちを切り結んでいくことができることを学んだ。

- ・障害者との出会いの中で、一緒に時間を過ごした子どもたちがありのままを受け入れるような集団となっていた。報告者も、自分の偏見や一面的な見方に気づいていった。障害者が当たり前、ありのままの自分でいられることの大切さも含めて、原学級保障をし、共に生活できることの大切さを確認した。

- ・クラスや学校、地域の中で、差別に立ち向かう力をつけ、反差別の仲間づくりをしていくこと。「ムラの子が社会に出たときに、自分で立って歩くだけの力をつけなあかん」「一人でたかえる力をつけてほしい」という発言があった。自分の地域を離れ、差別と出会ったときに、「それっておかしい」と言える力や胸を張ってふるさとを語れる取り組みが必要である。また、反差別の仲間づくりをしていくことも、社会に出たときの力になる。

- ・「差別はあかん」という授業ではなく、差別について本音で語り合う授業の中の子どもの「差別してもいい」といった発言をどう考えるのか。自由な発言が「本音」として出されることは必要かもしれないが、果たしてそれが「本音」なのか、そう言わせているものの中に、その子自身のしんどさや差別の現実はないのか、掘っていかなければならない。また、「本音」であっても、被差別の立場の子どもを傷つけはしないか立ち止まり、想像し、「本音を言わない」といった力もつけさせたいといった課題が出されたが、今後も実践や子どもの姿を差し出しながら議論したい。